

入選

高野 紗耶加 (たかの さやか) 松が谷中 2年生

作品名:「自分の心」

図 書:ぼくのメジャースプーン

私は辻村深月さんの「ぼくのメジャースプーン」という本を読んだ。読んでいる途中で何度か泣いてしまった。色々なことを考えさせられる一冊だった。

命というのは難しいものだと思った。動物の命と人間の命、どのような差があるのだろうか。虫や魚、植物の命とはどうだろう。ふみちゃんが大好きだったうさぎ達は、無意味に殺された。うさぎは死んだ、ふみちゃんの心は壊れた。だけど、うさぎの命は物扱い。殺されたうさぎは、紛れもなく「命」なのになぜ物扱いにされてしまうんだろう。家畜は殺してもいいのに、なぜペットは殺してはいけないのだろうか。家畜は、自分達が生きる為のものだからいいのか。だったら、ペットを殺すのも「生きる為に食べる」が理由なら殺してもいいんじゃないかと思う。命って難しいと思った。殺してもいい命と殺してはいけない命がある。例えば、虫は殺したっていい。アリをつぶしたところで何の罪にも問われない。私もつぶしたことがある。少し罪悪感が残ったが、特に申し訳ないという気持ちはなかった。アリをつぶしたのはわざとで、でも意味はなかった。やっちゃえ、という軽い感覚。昔、クラスメイトの男子がダンゴムシを持ってきた。そして、皆の目の前で真っ二つにちぎった。皆笑っていた。ナメクジに塩をかけたことがある。どんとどんとけるナメクジを見て笑っていた。とても残酷。でも、別に誰もそれを責めたりしない。虫の命は、とてつもなく軽いものなんだなと思った。

皆は、「命は大切」という。かけがえのないものなんだ、そう言う。確かに、私もそう思う。けれど、皆が言う「命」は全ての命にむけたものではない気がする。私も、ずっとそうだった。この本を読んで、命について考えさせられた。いつもは考えることのない、命についてよく考えさせられた。もっと、自分が生きていられることに対してのありがたみをもとうと思った。なんとなく言っていた「いただきます」や「ごちそうさま」。この本を読んだあとから、心をこめて言うことにした。絶対に虫を殺さないなんてことはできないと思う。でも、自分が生きていられるのも沢山の死があるからで、それを忘れてはいけない。そう思った。

次に、私は「復讐」について考えさせられた。主人公の「ぼく」は、ふみちゃんのために復讐をしようと試みる。ぼくがもっている力を使って。私がぼくの立場だったらどうしただろう。きっと、復讐に行く。やられたことと同じことをして苦しめる。けれど、この本を読み進めるうちに考え方が変わっていった。復讐なんてい

うものは結局は心を満たしてはくれない。復讐すれば、自分もそいつと同じになってしまう。確かに、復讐で得るものはあまりないなあと考えた。弟とけんかした時、先に言ってきたのは弟の方でも自分もやりかえしてるうちにどっちが悪いかわからなくなってくる。どんなにやりかえしても、スッキリできない。多分、そういうことなんだろうなあと考えた。友達に何か言われても冷静に対応できるようになりたい。

この本には、私の身のまわりでもよくあることがかかれていた。うさぎ当番も、本当は皆でやるのにいつの間にかふみちゃんがやるのが当然のようになる。学校でも、「誰か他の人がやってくれるでしょ」ということはよくある。最初は、それに感謝していてもだんだんそれを忘れる。ふみちゃんはそのことに文句も言わないでえらいなあと考えた。ふみちゃんは好きなおさぎの世話だからいいけど、それが自分の嫌なことだったら最悪だ。「他の誰かがやってくれるでしょ」という考え方がなくなればいいのに、と思った。

この本を読んで、自分の身のまわりのことや色々なことを考えた。ふみちゃんはとても優しくいい子で、私もこんな風になりたいなあと考えた。私は、ひねくれ者だし人のことを悪く言ってばかりだ。すぐにはなおせないと思う。けれど、少しずつなおしていきたい。ぼくも、ふみちゃんの為にすごく一生懸命だった。その姿に、とても感動した。あふれてくる涙をぬぐいながら読んだ。何度も、胸が苦しくなりため息をついた。とても、素晴らしい作品だった。

また、少し悩んだ時に読みなおしたいと思う。この本は、友達や家族にも是非読んでもらいたい本だ。ふだん、考えるきかいがあまりないことを考えることができた。この作者の、他の本も読んでみたい。